
Adam Bede の第17章について

松 原 恭 子

Adam Bede は、George Eliot の最初の本格的長編小説であるが、その第2巻第17章「ここで物語はひと休み」は、小説の筋とは関係のない作者の注釈に終始していて、特異な存在である。第1章から第16章まで約177頁にわたり、まだ物語はたいした進展もみせずに Hayslope 村の様子が詳しく描写されている。それが次の第17章に於ては、物語は完全にストップし、作者自らが読者に小説論や人間観を述べているのである。このように一章全体が注釈として書かれているのは、George Eliot の作品の中でも、この章だけであり興味深い。従来この第17章は、George Eliot の小説論を知る手掛りとしてのみ存在価値を認められて来たのであり、この作品全体として眺めた場合には、作者の “the endless talking”¹⁾ であると非難されることが多かった。しかし、この章は作品そのものと切り離れた小説論としてのみ価値があるのではなく、小説家としてのその後の展開の方向を示すものでもある。そこで、この作品に於ける第17章の位置付けをし、この章で述べられている作者の小説論や人間観とこの作品との関係から、作者としての展開の方向を探ってみたい。

I

Adam Bede は、“the first realistic pastoral novel”²⁾ であると賞讃され

-
- 1) Laurence & Elizabeth Hanson, *Marian Evans & George Eliot*, Oxford University Press, London, p. 208
 - 2) *ibid.*, p. 205.

ながらも、作者の注釈はこの作品の欠陥とされて来た。Joan Bennett¹⁾の次の意見はその代表的なものである。

An extreme example of this defect occurs in the first chapter of Book II, which is characterically entitled 'In which the story pauses a little.' In it she makes a wholly unnecessary apology for painting the Rector of Broxton, Mr Irwine, as a very pleasant man and not a saint and she discourses at unnecessary length about her own artistic aims. It is unnecessary in their achievement.

このように、作者の注釈に対する非難は、特に第17章に向けられている。第17章に於て、Irwine 牧師の描き方を弁明するのは不必要なことであり、小説家としての所信を述べるのも、それは自分の技倆への自信のなさから来ているのであり、そのような作者の作品中への介入によって、折角盛り上げたこの作品の “the illusion” を損うものであると主張している。しかし、この章は、ただ単に Mr. Irwine を有能なる牧師として描かなかったことへの弁明と、小説家としての抱負を語ったものであると見てよいであろうか。

W. J. Harvey は、大体に於て Joan Bennett の意見に賛成すると云いながらも、小説技法に対するアプローチより、優れた見解を示している。この第17章は、読者に対する作者の語りかけとして始められているのが、途中で作者は聞き手にまわり、年老いた主人公の Adam が思い出話として Irwine 牧師のことを語っていることを、Harvey は指摘している。作者も又聞き手にまわることによって、作者は小説の世界と現実の世界をつなぐ橋の役をなしているのである。George Eliot の小説の中の “the illusion of reality” とは、それ自体で完全なものではなく、実際の現実の世界と境界を接したものである。だから作者のこのような立場は “the kind of reality of the story” を創りだすのに重要な役割を果しているのである。この W. J. Harvey の見解は、Henry James の描いたような “self-sufficiency” な小説の世界

1) Joan Bennett, *George Eliot, Her Mind and Her Art*, Cambridge, at the University Press, p. 106

とは次元の異なった **George Eliot** の小説の中での、作者の作品中への登場の意味をみごとに分析するものである。¹⁾

しかし、この第17章に於ては、その中で **Irwine** 牧師の描き方についての弁明だけでなく、それを例にして一般論として小説論へと話を発展させていて、この点に重点を置いて読むと、**Irwine** 牧師の件は一例にしかすぎず、彼女はこの章で小説論を述べていることになる。即ち、この章そのものが、そのどちらとも取れるような非常に曖昧なところを持っているのである。**Joan Bennett** はこの章を内容からだけ論じ、**W. J. Harvey** は技巧的な面から論じているのは、そのためであると考えられる。

そこで、まずこの第17章をもっと詳しく調べてみたい。第16章より第17章への移行は読者が自然に受け取れるように工夫されている。第16章で **Arthur** が **Hetty** に対する恋心に思案にくれて、**Irwine** 牧師に相談に行くが、結局何も話しだせずに帰って行く。そこで、この第17章で作者は **Mr. Irwine** が牧師でありながら、人生の重大な岐路に立つ **Arthur** に対して何をするとも出来なかったこと、彼を賢明な忠告をするような牧師として描かなかった理由を説明する。それは、小説家の使命はこうあるべき姿を描くことにあるのではなく、あるがままの姿を描くことにあると考えるからである。これから話は小説論へと発展し、その裏づけに色々な例を次々と持ち出してくる。やがて、話を **Mr. Irwine** にもどすのだが、それは第16章までに描かれている **Mr. Irwine** ではなく、それから60年後の **Adam** の思い出話として、後任の牧師と比較されているのである。ここで作者が60年後の回想を入れているのは、この作品の書き出しと関係がある。

With a single drop of ink for a mirror, the Egyptian sorcerer undertakes to reveal to any chance comer far-reaching visions of the past. This is what I undertake to do for you, reader. With this

1) **W. J. Harvey**, *The Art of George Eliot*, Chatto & Windus, London, pp. 69—72

drop of ink at the end of my pen, I will show you the roomy workshop of Mr Jonathan Burge, carpenter and builder in the village of Hayslope, as it appeared on the eighteenth of June, in the year of our Lord 1799.¹⁾

このように作品の冒頭に於て、まず作者が舞台に現われて、大工の仕事場風景をくり開けてみせるのである。このような作者の姿勢は *Broxton Parsonage* の描写 (pp. 52—53) や *Hall Farm* の描写 (pp. 69—73) にも共通するものである。そして、これは作品中には “I will show you”, “you see”, “as you know”, “you perceive”, “my friend” などの挿入や数多くの注釈という形をとってあらわれ、最後にエピローグをつけて締め括ることにより、全編を通して一貫した作者の姿勢となっている。この作品全体が、このような枠組の中で語られ、作者が読者に対して語るという姿勢が保たれている。

だから第17章に於ても、作者はまず読者に次のように語りかけているのである。

‘This Rector of Broxton is little better than a pagan!’ I hear one of my readers exclaim. (p. 178)

そして第1章に於て1799年という過去に遡って語り始めた物語を、この第17章でそれから60年後である現在（即ち、1858年という執筆の年²⁾）にひきつけたのである。だから、年老いた Adam が登場して、Mr. Irwine はよい人であったと懐かしむのは、第1章の書き出しと呼応するものである。年老いた Adam は、いかにも Adam らしく話をする。読者も、Adam や Mr. Irwine の人柄については、第16章までに相当の知識を与えられているので

-
- 1) George Eliot, *Adam Bede*, Holt, Rinehart and Winston, Inc., New York, p.1, 以下この作品からの引用の場合はページ数のみしるす
 - 2) Gordon S. Haight, *George Eliot, a Biography*, Oxford, at the Clarendon Press, pp. 249—294

あるから、この Adam の昔話にたいした抵抗感もなくついて行けるのだと思われる。だが、ここで Mr. Irwine の後任の牧師 Mr. Ryde なる人物が導入されていることは問題である。彼は、この小説の最後の章エピローグ(1807年)からまだ十数年しないと Hayslope に現われない人物であり、この作品の中で何らの役割も与えられていない。ただ、都合のよいことには、Mr. Ryde は性格的にも牧師としても Mr. Irwine とは対照的な人物であり、Mr. Irwine を説明するには、抽象的な言葉で説明するよりは、便利な人物である。他にも同じような例はみられる。¹⁾ これは、あくまで具体的に語ろうとする作者の意図として認めるにしても、策に溺れすぎた例であると思われる。

しかし、前にも述べたように、この章を全体として眺めてみると、作品を書く作者の姿勢は統一されていて、決して、この章は全体から浮きあがった作者のおしゃべりではない。だが、Mr. Ryde や Mr. Gedge の導入にみられるような未熟さは、この章の冗慢さへとつながるものでもある。²⁾ そのために、折角の作者のこの章を作品全体の中にとけ込ませようとする意図が弱まってしまい、この章全体が無駄な“the endless talking”であるような印象を与えるのであると思われる。しかし、たとえそれが失敗に終わろうとも、この章を作品全体の中へとけこませようとする努力がされているということは、見落してはならない。ここに、今後彼女が解決しなければならなかった課題の一つがあることを示しているからである。そして、それはこのように形式的に作品の中にとけこませることによって、解決することはできないことをも示していると思われる。そして、この作者による注釈というコン

-
- 1) たとえば、第17章の最後に人間愛について説明する時に Mr Gedge という人物を例にだしているが、Mr Gedge もそこにだけ利用されている人物にしかすぎない。
 - 2) しかし、この詳しく、しかも具体的に物事を説明しようとする態度は、入念な心理描写へとつながるものでもあり、この作品に於ては Arthur の心理描写が優れている。

ヴェンションは、*Middlemarch* に於て成熟した姿を持つに至る。¹⁾

II

次に、この第17章に於て述べられている小説論について考えてみたい。小説を書く場合に、George Eliot が一番重要視しているのは、真実を描くことである。それがどんなに困難でむつかしいことかということを彼女はよく認識していた。そのことを次のように語っている。

So I am content to tell my simple story, without trying to make things seem better than they were; dreading nothing, indeed, but falsity, which, in spite of one's best efforts, there is reason to dread. Falsehood is so easy, truth so difficult. (p. 180)

彼女は、物事をありのままに描こうと努力した。彼女が表現しようとした小説に於ける真実とはどのようなものであろうか。それを、彼女は、鏡の比喩を使って説明している。

My strongest effort is to avoid any such arbitrary picture, and to give a faithful account of men and things as they have mirrored themselves in my mind. The mirror is doubtless defective; the outlines will sometimes be disturbed the reflection faint or confused; but I feel as much bound to tell you as precisely as I can what that reflection is, as if I were in the witness-box narrating my experience on oath. (p. 178)

ここに述べられているように、小説に於ける真実とは、彼女の心に映じたものを描くことであり、それは真実そのものではない。たとえ鏡に映る像が

1) cf. W.J. Harvey, *op. cit.*, (p. 80, p. 88)

海老根宏, 「*Middlemarch* の Authorial Commentary」, 「英文学研究」, 日本英文学会 March 1969

和知誠之助, 「ジョージ・エリオットの小説」南雲堂, 東京, p.199

歪むことがあっても、大切なのは、それをそのままに描きだすことである。即ち、小説に於ける真実とは、写真のように真実そのものを映しだすことではなく、心という鏡に映った像を絵に再構成することである。だから、実在の人物にヒントを得て描く場合にも、描かれた人物はその人物そのものではない。このことから、Adam は父を、Dinah は叔母をモデルにしたものであると云われるのを嫌って、*Adam Bede* には肖像画は一つもなく、叔父や叔母こそ Dinah や Seth に似ているのである¹⁾と云った彼女の言葉が理解できるのである。

しかし、これ程の信念を持ちながらも、Adam や Dinah のように、彼女の身近かにモデルと目される人物がある場合には、作者としての客観的な立場が保ち得ず、彼女自身の求める真実から一歩退いたものになってしまうことも否定できない。Dinah は、欠点というものが全然なく、そのために人間的魅力に乏しい。Adam は、Reva Stump が分析している²⁾ように、他人に対する共感に欠けた人間から試練を経て人間的に成長していく過程を跡附けることが出来るにもかかわらず、この作品の中では Arthur や Hetty よりも読者にとって印象の薄い人物になっている。³⁾一方、Hetty には、作者の姿勢に片寄りがありながらも、美しく愚かな田舎娘として生きた人間像になっているし、Arthur は、意志の弱い地主の後継ぎが、善意はありながらも、Hetty を破滅させてしまう過程がよく描かれていて、Blackwood に、確かに Arthur のような人物はいると思うが、好きにはなれそうにないと云わせている⁴⁾程である。このように、登場人物という面からみると、主筋になる Adam や Dinah を十分に描き得ていないのは、表現力がまだ未熟であったためもあるだろうが、人物を描く作者の姿に片寄りがあるということ

1) Gordon S. Haight (ed.), *The George Eliot Letters*, Vol. III, p. 155

2) Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels*, University of Washington Press, Seattle, pp. 36—66

3) cf. 和知識之助, 「ジョージ・エリオットの小説」, p. 93

4) Gordon S. Haight, *op. cit.*, p. 254

は、作者の人間認識の不徹底さにも、一因があるように思われる。

しかし、Mrs Poyser を中心とする Hayslope の描写が優れている¹⁾ことに関しては、反対する人は恐らくあるまい。この描写の成功はオランダ絵に描かれている平凡な人々の生活²⁾に対する共感から生れたものであり、自分の身近かにいる名もなき人々に対する人間愛に根ざしているのである。それは次のように語られている。

I have come to the conclusion that human nature is lovable—the way I have learnt something of its deep pathos, its sublime mysteries—has been by living a great deal among people more or less commonplace and vulgar. (p. 187)

このような周囲の平凡な生活を送る人々に対する共感と人間愛があるからこそ、Adam の同僚の大工達の描写や、Mrs. Poyser を中心とする Hayslope の人々の描写が精彩を放っているのであろう。何故 George Eliot は、このような背景描写ともいふべきものに力を入れているのであろうか。それを考えるためには、まず、彼女の作家としての素質がどのようなものであるのか眺めてみなければならない。

この章で、George Eliot が、英雄や絶世の美女でなく、片隅でひっそりと生きる人々に対して照明をあてることを強調しているからといって、そのような人々の人生の一断面を詳細に抉り出すということにはならない。彼女にとっては、真実そのものが価値があるのではなく、人生に対する共感をか

1) cf. Leslie Stephen, *George Eliot*, Macmillan and Co., Limited, London, pp. 77—78

F.R. Leavis, *The Great Tradition*, Chatto and Windus, London, p. 36

2) It is for this rare, precious quality of truthfulness that I delight in many Dutch paintings, which lofty minded people despise. I find a source of delicious sympathy in these faithful pictures of a monotonous homely existence, which has been the fate of so many more among my fellow-mortals than a life of pomp or of absolute indigence, of tragic suffering or of world-sirring actions. (p. 180)

きたてる力を持っているために価値があるのである。ここで、自分の身近かに生きる平凡な人々を描きたいと云っているのは、Jane Austen のように自分の見聞した範囲のもの以外は描かないというのでもない。彼女の描きだす世界は広い。主人公が女性に限定されるわけでもない。Middlemarch を持ちだすまでもなく、Adam Bede に於てさえ、その登場人物は、老地主から大工、職人、百姓に亘っている。題材から考えてみても、Adam Bede や The Mill on the Floss のように自分の育った田舎を舞台にしたものから、Romola のようにイタリーを舞台にしたもの、Felix Holt では選挙問題を、Daniel Deronda ではユダヤ人問題をと、彼女の興味は巾広くスケールは大きい。Jane Austen が、どの作品でもよく似た舞台設定をし、その中で暮らす人々につきぬ興味を見出して、人生に於ける真実を追求して行ったのとは違い、George Eliot は人生を多方面より分析し再構成しようとした作家である。このような彼女の作家としての姿勢は、Adam Bede の中にもよくあらわれている。

このことは、前にも述べた Mrs Poyser を中心とする Hayslope の描写と関係がある。即ち、この作品に於ては、Adam や Arthur や Hetty が生活している Hayslope 村の自然や、村人達の生活感情を詳細に描きだしているのは、環境が人間に及ぼす影響力を重要視しているからである。Arthur と Hetty の恋が実らず破滅して行ったのは、彼らの性格の中に原因があっただけでなく、彼らの住む Hayslope 村も大きな影響を及ぼしているのである。社会から切り離しては、彼らの悲劇を描くことは出来ない。¹⁾そして、この作品では背景になる Hayslope の描写に非常に力を入れて、田舎の生活をリアリティに描きだすことに成功している。Mrs Poyser は、人をひきつけずにはおかないし、Hayslope の村は生々としていて、田園小説として賞讃されるのも、頷けるのである。

しかし、そのことは、背景描写に力が入りすぎているような感じを与える

1) 宮崎孝一、「Adam Bede の背景」、『イギリス小説論考』、開拓社、東京

ことにもなり、次のような非難がされることにもなる。

It used to be that every discussion of *Adam Bede* began with and had a great deal to say in praise of Mrs Poyser, who is the centre of this rural life. Even a critic as hard-headed as Dr. Leavis says that Mrs Poyser deserves all the praise that she has received. I should agree, with the reservation that, well done and amusing as she is, Mrs Poyser is a little too much tried for, that we see too much of her and all the villagers of Hayslope. That is to say, that the virtues in the presentation of Mrs Poyser work to establish her as a character rather than as something that enlarges and enriches the meaning of the whole novel.

In contrast to the vividness of the background, the main characters in *Adam Bede* lack the color and interesting conventional heroes: they are limited in personal appeal and in their own experience.¹⁾

この詳細な背景の描写は、Arthur と Hetty の悲劇を描くためには、どうしても必要であったとしても、作者の意図は題名にも示されているように、Adam を主人公とした小説を描くことであった²⁾ことを考えなければならぬ。この点から、この作品をみると、背景の描写や Arthur の心理描写が非常にリアリスティックにされていて、読者に訴える力が大きすぎることは、作品としての欠陥である。そのために、彼女が意図した主題である Adam の試練を経ての成長とその後の Dinah との結婚の印象が弱められていることは否定できない。読者の関心が Mrs Poyser や、Arthur や Hetty に向けられる程、Adam や Dinah の結婚に向けられるかどうかは疑問である。この原因は処女作であるための作者としての技倆の未熟さのためばかりであるとは考えられない。Adam の描き方がもっと巧みであったにしても、Dinah がもっと人間として女としての悩みや苦しみを持った人物として描

1) Jerome Thale, *The Novels of George Eliot*, Columbia University Press, New York. pp.16—17

2) Gordon S. Haight (ed.), *op. cit.*, pp. 502—3

かれていて、この二人の結婚が必然的なものを感じられたにしても、この問題は依然として残ったと考えられる。

この破綻は彼女がこの作品を書こうとした時に既に予見できるように思われるのである。この作品を書くヒントになったのは、叔母からきいた自分の生んだ子供を殺して処刑される女の話である。自分の罪を自白しようとしないう女を **Dinah** が獄に訪ねて共に祈り、遂に自白させる場面をこの作品のクライマックスにしようと考えている。¹⁾ このクライマックスには、主人公の **Adam** は直接には関係がない。このことから、最初から作者の関心は主人公にのみ集中していたのではないことがわかる。クライマックスは、当然作品の中で大きな比重を持つはずであり、このことは、**Adam** を主人公にした作品を書くことだけでは満足できないものが、最初から作者の心の中にあっただけであることを示しているのではないだろうか。

即ち、George Eliot が *Adam Bede* に於てみせたこの破綻こそ、*Mid-
dlemarch* への展開の方向を示すものである。*Adam Bede* に於て、主筋を描くことに徹底し得ず、作品のバランスを崩したのは、多様な人間の実体を捕え、それを彼女の心という鏡に映ったままに表現することに忠実であったためではないだろうか。*Adam Bede* に於て描き出されている人生の姿は、多角度より捕えられたものである。

このような彼女の心という鏡に映る多角度より映しだされた人生をありのままに描くためには、プロットはもっと複雑なものとならなければならないことを、この *Adam Bede* に於ける失敗は語っているように思われるのである。複数のプロットによってこそ、多様な人間の実体を把握し、人生を統合的に表現することが出来るのである。しかし、複数のプロットを取り扱うには、高度な技術が必要である。*Adam Bede* に於ては、作者はまだそのことを意識していない。むしろ一つのプロットの中にすべてを盛り込もうとして失敗しているのだと云えよう。

1) *ibid.*

その後中編ながら *Silas Marner* では、二つのプロットを絡み合わせることに成功している。しかし、*Felix Holt* に於てのもっと複雑なプロットの絡み合せの試みは失敗に終わっている。しかし、この作品を書くことは *Middlemarch* へ向っての前進であった。そして、*Middlemarch* に於て、複雑のプロットを複雑に絡み合わせて、*Middlemarch* という町に住む *Dorothea, Casaubon, Lydgate, Rosamond, Fred, Mary, Bulstrode* などをもごとに描き出し、彼らを通して、彼女の心という鏡に映る人生の姿を再構成することに成功したのである。

George Eliot の作品の初期のもの *Adam Bede* や、*The Mill on the Floss* は、彼女の少女時代の思い出をもとにして書かれた田園小説として評価されることが多いが、後期の作品への展開の萌芽は既に処女作とも云うべき *Adam Bede* の中にあるのであり、彼女の作品は全作品の展開の中に於て眺めなければならないことを、この第17章は示しているように思われる。それは丁度、*Virginia Woolf* がその処女作 *The Voyage Out* の中で、作家志望の青年に「沈黙についての小説」¹⁾ が書きたいと述べさせているのが、その後の彼女の作家としての展開と、意識の流れの小説の一つの極点を示す *The Waves* の完成を暗示しているのと似ている。この作家志望の青年の小説に対する抱負²⁾ は、それを *The Waves* と重ね合わせてみた場合、明らかに *V. Woolf* 自身の小説に対する抱負でもあったのであるから。

1) *Virginia Woolf, The Voyage Out, The Hogarth Press, London, p. 262*

2) *ibid.*, “What I want to do in the writing novels is very much what you want to do when you play the piano, I expect. We want to find out what’s behind things, don’t we?... Look at the lights down there, scattered about anyhow. Things I feel come to me like lights... I want to combine them... Have you ever seen fireworks that make figures?... I want to make figures.” (p. 266)